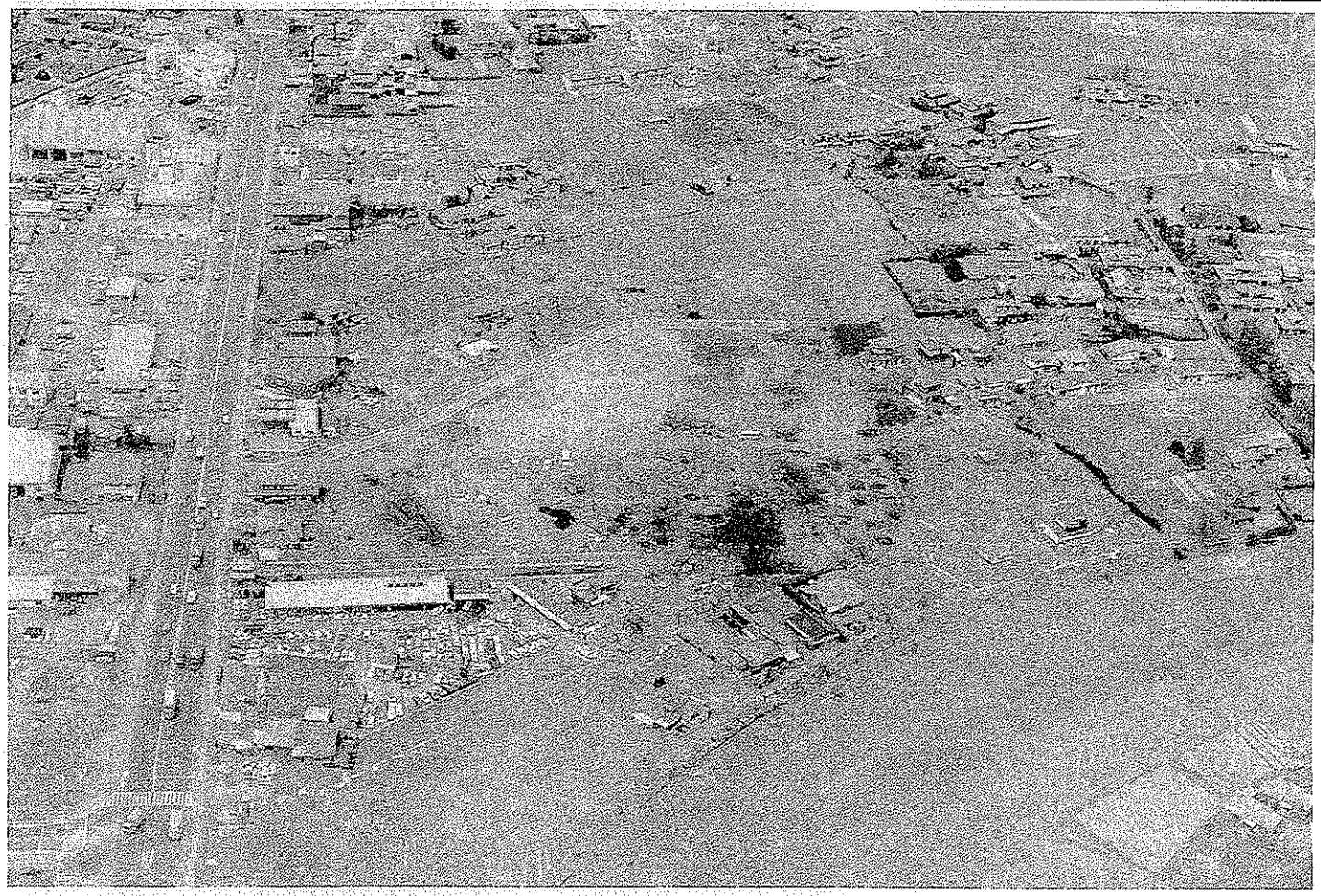
れきみん
となん歴民だより vol.18

Morioka tonan history and folklore museum

平成21年3月17日発行

発行　盛岡市都南歴史民俗資料館　盛岡市湯沢 1-1-38　TEL019-638-7228



当館所蔵写真パネル　百目木遺跡〔国道４号線沿い旧サティ周辺〕の空中写真（１９７８年４月撮影）

— もくじ —

・<寄稿>見前町の七夕について

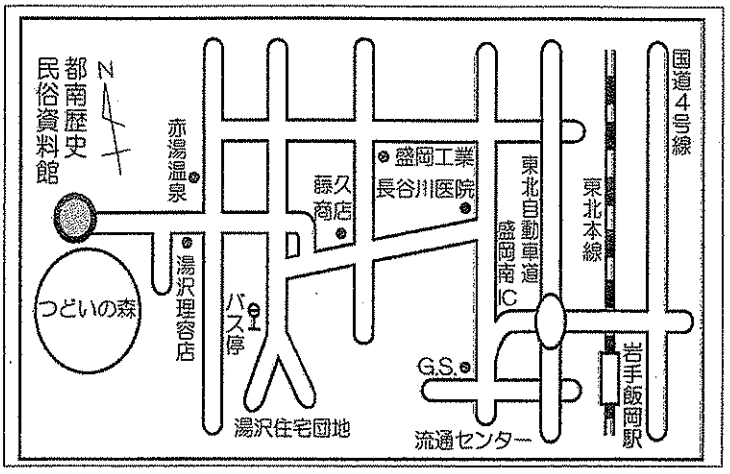
・盛岡藩領内に伝わった『たとえ』②

・資料は語る⑱

・盛岡市所在指定文化財紹介⑱

・となんの昔ばなし⑱

MAP☆ACCESS



○利用案内

開館時間　午前９時から
　　午後４時まで

入館料　無　料

休館日　月曜日
（休日に当たるときは、直近の平日）
年末年始

＜寄稿＞　見前町の七夕について

民俗芸能スケジュール紹介ウェブサイト「みちのく芸能ごよみ」管理人
岡　田　現　三

今回は、民俗芸能スケジュール紹介ウェブサイト「みちのく芸能ごよみ」を管理運営している岡田現三氏から、見前町の七夕について寄稿いただきました。

「まーつり　まーつり　まーつりよー　　なーにー　まーつり　まーつりよー
たなばた　まーつり　まーつりよー　　ことしは　ほうねん　まんさくだー
ますで　はからねで　みではかった　　どっこいしょー」

７月下旬の週末、見前町（現在の東見前・西見前の南端）に「七夕（たなばた）」の唄がひびきます。

七夕というと「笹かざり」の行事が全国的に知られています。しかし、ここ見前町の「七夕」は、子どもたちが凸型のアンドンをもって練り歩くもの。お囃子を鳴らして唄いながら地区内をまわり、大きな家や四つ角では門つけの踊りを披露します。

門つけでは、２列の踊り手が入れ替わったりしながら、華やかに踊ります。さんさ踊りの“七夕くずし”はこの踊りがもと。途中には「はらはらはらせ」という掛け声がかかります。

踊りのあとは、家々でふるまわれるお菓子やおにぎりで一服。こうやってゆっくり地域を歩いていくうちに日も落ち、アンドンに灯りが点されます。

かつては岩手県内のいたるところで、こういった「七夕」の行事がおこなわれていました。見前町田植踊の踊り手でもあり「七夕」を中心的にすすめている藤原幸行さんは次のように語っています。

「もともとは若者が中心の行事ですが、今は子どもが主体でやっています。田んぼばかりだったこの地域も、かなり家がふえてきました。いったんは中断してましたが、新しい住民も多くなって、『だからこそ全員参加でやろう』と、子ども会でやることにしました。復活して３０年以上になります。」

盛岡市内では現在でも同じような行事が、馬町（清水町）・神子田町などで「万灯（まんとう）」という呼び名でおこなわれています。

写真提供：飯坂真紀氏

盛岡藩領内に伝わった「たとえ」②

「南部の鮭の鼻曲がり」

（なんぶのさけのはなまがり）

昔からの「ことわざ・たとえ」は、読み書きのできなかった農民・庶民を対象に「口伝え」という言葉によって伝承されてきました。この「たとえ」のなかには、その地方独特の風土と土地柄をもった、面白いたとえが見られます。

三陸沿岸の川には昔から、秋にサケが上ってくる川は多く、秋サケの初物は将軍家に献上するのが慣例となっていました。また大量に生産された塩ザケは、江戸に送られ人々の口を潤しました。江戸の近辺の漁師たちはこれをねたみ、サケの鼻の曲がっているのを見てけなしました。

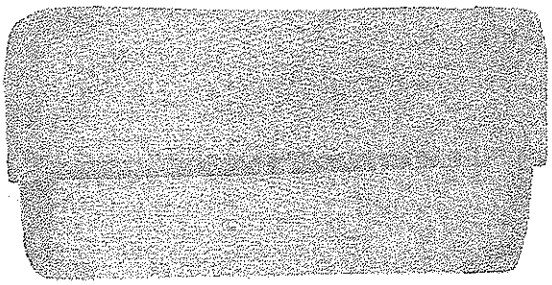
このことから「心がひねくれている」というたとえと、南部のサケは鼻が曲がっていてもおいしいということから、「見かけは悪くてもおいしい」というたとえに使うようになりました。

南部のサケを江戸へ送り込んだ人は、大槌町の吉里吉里（きりきり）に在住した盛岡藩の御用船を務めていた前川善兵衛という人でしたが、「鼻曲がり鮭」という名は、彼が考え出したブランドだと言われています。

参考・引用資料：『北東北のたとえ』毛籐勤治　編著　岩手日報社

資料は語る　⑱行李（こうり）

当資料館の収蔵資料をひとつ取り上げて紹介します



行李は柳、籐（とう）、竹などを箱の形に編んだもので、物をしまう道具です。シンプルで使いやすく、値段も安かったことから、江戸時代に入って全国各地で生産されて普及しました。「行李」という言葉は「旅人の荷物」という意味の中国語からきていることからもわかるように、衣類や身の回りのものを入れる現代の旅行かばんのような役割を果たしてきました。つい最近まで、嫁入り道具を入れて運んだり、奉公人（ほうこうにん）が奉公先（ほうこうさき）に入るときに身の回り品を入れてもって行ったり、一般家庭でも衣類をしまっておくのに使っていました。そのうち特に小型のものは、弁当箱としても使われていました。

引用資料：河出書房新社　『日本の生活道具百科２　住まう道具』　１９９８

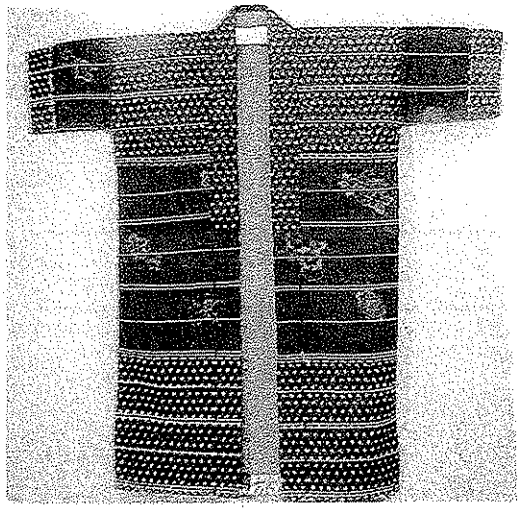
盛岡市所在指定文化財紹介⑱

県指定有形民俗文化財

玉山地域の野良着　一式

（たまやまちいきののらぎ）

平成１８年９月８日指定



農作業のときに着る仕事着は、地域によってさまざまですが、玉山地域に伝わる野良着は農作業を行ううえでの機能性と、地域特有の装飾性を兼ね備えた美しい野良着です。

スッパと呼ばれる野良着は、肌着の上に着用する腰丈までの上着です。肩と裾（すそ）、袖（そで）の部分に木綿（もめん）の布地を使い、それ以外の部分には麻布を使っています。

中段の麻には桜や菊、紅葉など「飛び模様」といわれる地域独特の型染めが施されています。絣模様（かすりもよう）も「ポツ絣」という水玉のような柄が特徴的です。

昔は、田畑の仕事は大変で、生活も楽ではありませんでした。そのような中でも農家の人たちのオシャレな生活を垣間見ることができます。

参考・引用資料　盛岡市教育委員会　『もりおかの文化財』　２００８

玉山村教育委員会　『玉山の文化財』　２００３

となんの昔ばなし⑱

『いたこ塚』

津志田の国道わきに、径四ｍ、高さ五〇㎝ぐらいの円形の小塚があります。

この地に遊廓（ゆうかく）が栄えていたころ、ひとりの巫女（みこ）がいて遊女（ゆうじょ）たちに親しまれていました。ふとした病がもとで死んでしまいましたが、身よりもない孤独なこの巫女を、遊女たちはいたく同情して手厚く葬り供養してやりました。それが、この塚だといいます。いまでも津志田念仏講中の人たちが、手厚く祀っています。

出典　『となんの民話』

（都南歴史民俗資料館）